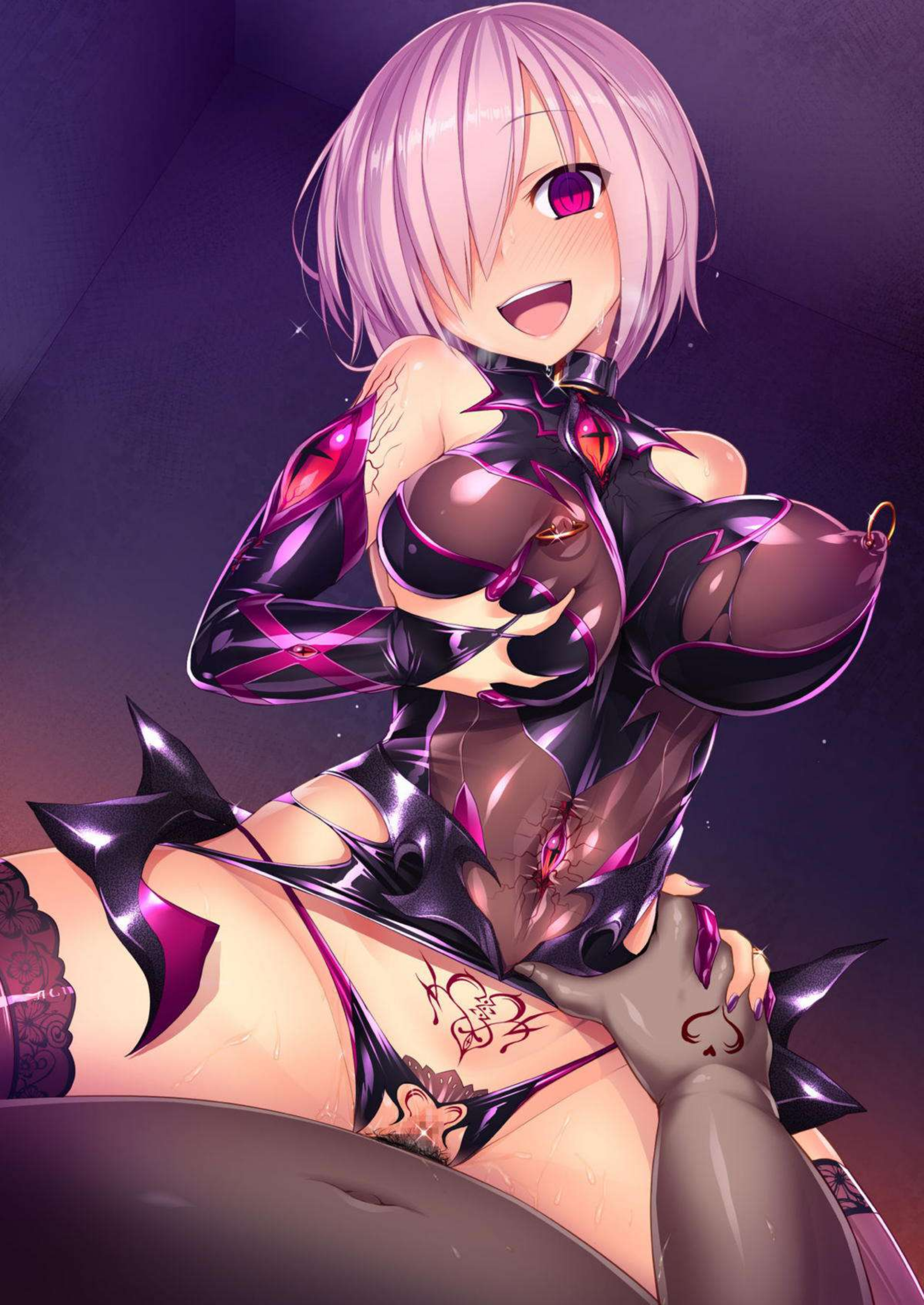
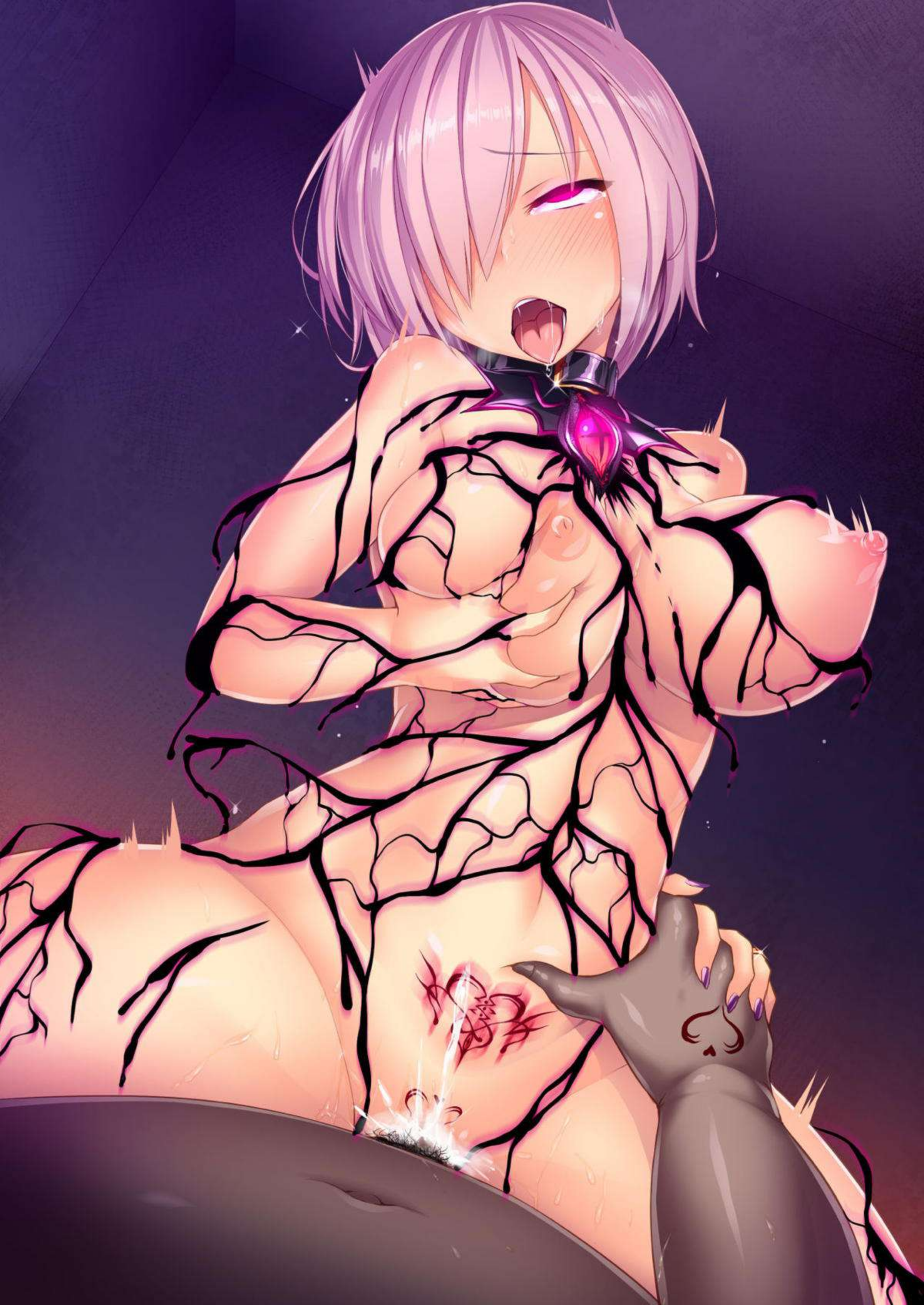


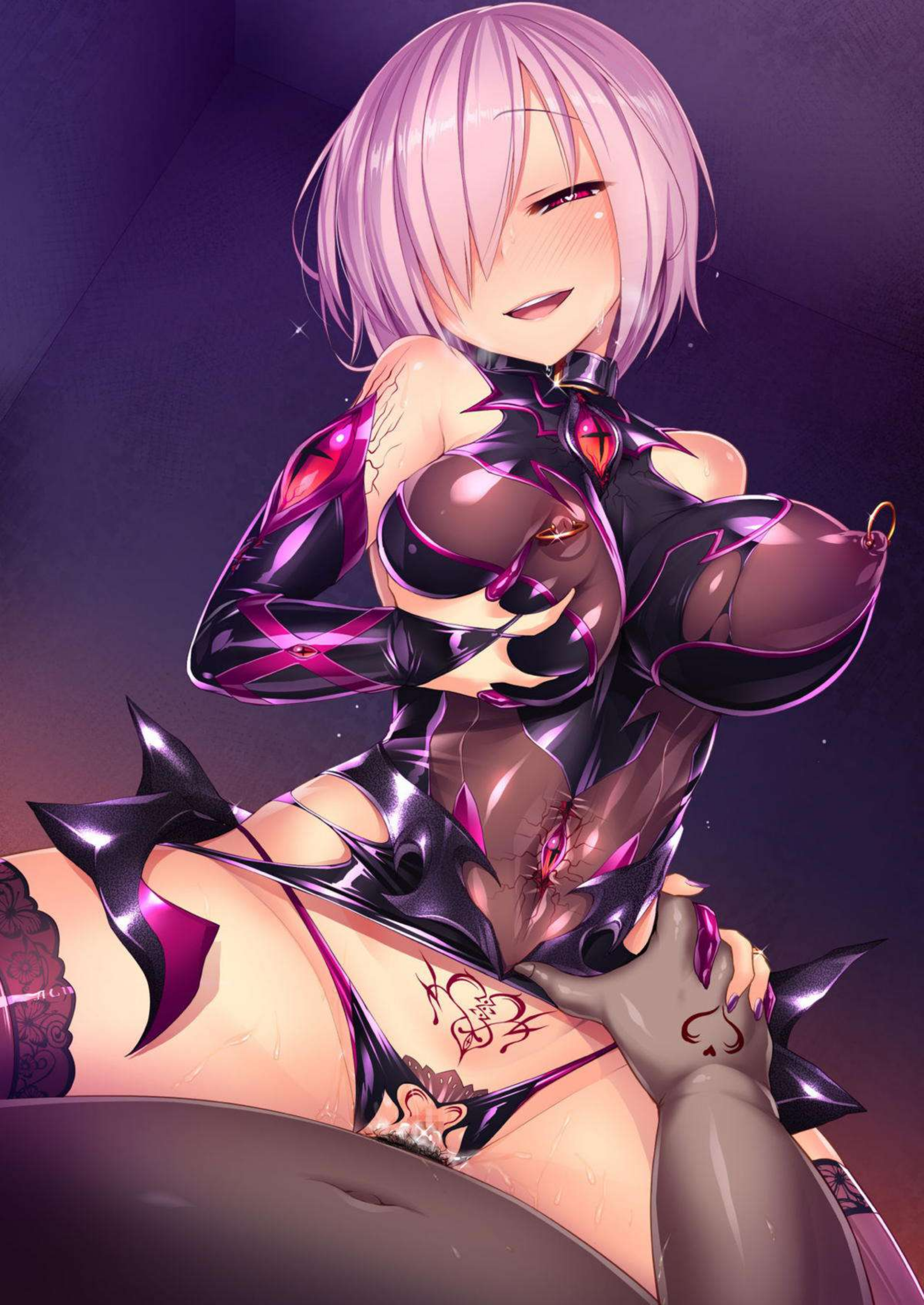
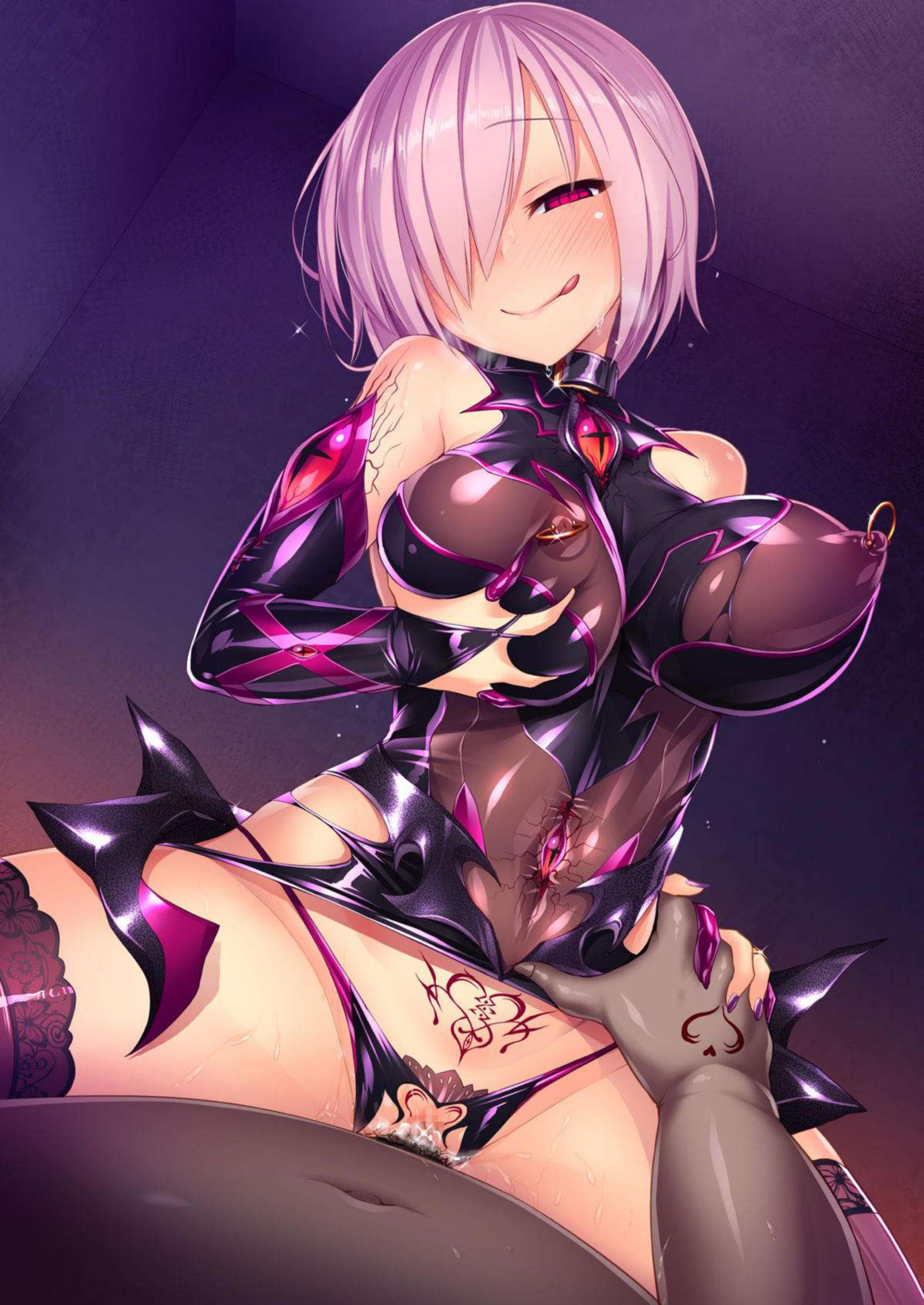
白い水着の股間は淫らな蜜に濡れそぼり、
暗い染みを浮かばせていた。
当然だ。私は御主人様の性奴隷、
淫婦（ハーロット）なのだから。

たったの一突き。物理的な距離にして、十センチ程度の移動。
それだけで私は―
―思い出した❤
隷従の幸福を、肉の法悦を。

抑えられない。抑える意味なんてない。
何に義理立てしていたのだろうか。
リズミカルな打擲音は次第に激しく、加速し、官能のボルテージ
はそれに倍して肥大してゆく。



私という存在が、凄まじい勢いで変質をはじめたのがわかった。
オセロの盤面、その最後の一マスを黒に染め抜くように。
私の身体が、心が、
御主人様のためのモノへと作り変えられてゆく。
これまでの変化が些事とすら言える、
圧倒的で絶対的で不可逆の変質。



「序列三十二位、色魔アスモデウス――
ここに受肉しました❤」
「御主人様、御命令を❤」